東方司操録

⊠≠⊠

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

突如現れた謎の男。

彼が何者なのかは、誰も知らない、分からない。

彼は何をし、何を見るのか―

どうも、≠と言う者です。

この作品が私の初作品となります故、温かい目で見守って頂ければ幸いです。

タグにもありますが、不定期投稿となりますので、ご注意ください。

誤字・脱字等ございましたらご連絡ください。至急、訂正致します。
また、アドバイス・感想等も頂ければ幸いです。

目次

謎の青年 ―― 1
阻止と実験 ―― 11

謎の青年

ここは真っ白な空間。

何も無い。いや、「無」があった、と言うべきか。

「無」は、いつしか意思を持つようになった。

それがいつなのかは誰にも分からない。

これはそんな「無」のお話。

―深い森の中

一人の男が何か探し物をしながら歩いているようだった。

「…おっかしいなー？確かこの辺に…おっ、あったあった。」

そう言って、彼は地面に突き刺さったソレを引き抜く。
どうやら彼は、彼が探していた物を見つけたようだ。
その手に握られていたのは…真っ黒な刀。
「いやー見つかってよかったー失くすとまた怒られるところだった…」
どうやら彼にとってあの刀は余程大切な物らしい
「落ちる時に能力使ってたのが拙かったかなー…まあそのおかげでこの辺りの地形を多少把握できた。」
そう言いながら黒い刀をどこからか取り出したこれまた黒い鞘に納める。
落ちる時、というのにはツッコまない。
「うっし、じゃあ着いた事だし…?」
その時、彼の耳にとても小さな、集中しなければ聞こえない程の音が聞こえた
その音は—
「…か助…て!」
—人間の声。
「っ!」
彼はどうやらそれに気づいたらしく声のした方に全力で走り出した。
(クソッ!やっぱりまだこの身体は慣れないなッ…!)

そう思いつつも先程悲鳴が聞こえた場所に近づいていた
「誰か助けてー」
はっきりと聞こえてくる声、その声は女性、それもまだ幼い少女の声だった。
それに加え、低音のそれに吐き気を催すような声で話す「化け物」
「クカカ…こんな森の中に誰か居ると思ってんのかあァ?」
「うう…」
彼女は必死に逃げようとするが、どうやら足首を挫いたらしく立てないでいる。
「久しぶりの食事だ…さて、どこから食ってやろうか…」
「ひっ…」
少女は、恐らく彼女が初めて感じたであろう「死」への恐怖で声にならない悲鳴をあげる。
「…決ーめたァ、やっぱり生きたまま頭からだよなァッ!」
少女を食おうと近づく化け物の顔。
「カカカ…いっただっきまーすゥウ」
「おい」
突如響く声。
「あ?」

食事を邪魔された化け物は「彼」を睨み付ける。
「テメェおいニンゲンンンン…俺の四日ぶりの食事を邪魔したなァァ？」
「そこの人、離れておいて」
彼は化け物を無視し、言う。
「えっ…あの…」
来るはずがない助けが来たことに対し、驚きが隠せない彼女。
「！成程足が…じゃあそこから絶対に動かないで」
「はっ…はい…」
「オイテメェッ！無視してんじゃねぇッ！」
大声で叫ぶ化け物に―
「うるさいよ…黙ったらどうだい？」
少し挑発をする
「テメェ…調子に乗んじゃねェェッ！」
そう言い、一直線に突っ込んでくる化け物
「―フッ」
その攻撃を真上に回転しながら跳ぶ事で回避、そのまま、いつのまにか取り出した刀を変形、弓へと形を変え、素早く数本の矢を放つ。

「何ィッ―ぐあッ！」
放たれた矢は化け物の手足を貫通、そのまま地面に深く刺さり、化け物を倒れさせる。
「クソッ！この程度…グッ…抜けないだとォ…？」
化け物は力任せに引き抜こうとするが、矢には返しがついてある為、簡単には抜けない。
更に身体を痺れさせる毒を塗ってある。
「ふぅ…段々コレにも慣れてきたな…」
そう言い、手に持った弓を再び刀に戻し、鞘へと納めながら言う。
「さてと…どうする？君。」
彼は地面にうつ伏せで倒れている化け物を見ながら言う。
「クソッ…テメェェ…殺すゥゥ…食ってやるゥゥ…」
化け物はその眼に怒りを燃やしながら彼を睨む。
「ハァ…全く…君は暫くそこで寝てると良い」
そう言いながら矢を消す。矢が無くても毒が回り、動く事もままならないだろう。
化け物が何か言ってくるが、無視して少女の下へと向かう。
「君、大丈夫かい？足以外の怪我は無い？」
「あっ…えっと…大丈夫です…」

「そう、なら良かった。君は何処から来たの？」
「も…森の向こうの村からです…」
少し怯えながら言う少女。
それもそうだろう、先程まで生と死の狭間に居たのだ、怯えない訳が無い。
「歩ける？なんなら送ろうか？」
「いっ…いえ、大丈夫で…ッ！」
立とうとした彼女は足の痛みに顔を歪ませる。
「ほら、無理しないで…村…どっち？」
「…あっちです…」
「分かった。じゃあ送るね。目を閉じて」
「？何故ですか？」
そう問いかける少女に対し彼は言う
「いいからいいから、ほら…空間把握…座標確認…」
「？わ、分かりました…」（この人…何を…）
「座標指定…移動開始」
その瞬間、不思議な感覚がした。まるでいきなり別の場所に飛ばされたように…
「…目、開けて良いよ」

目を固く瞑ったままの少女に告げる。
「…えっ？」
少女は目を開き、驚愕する。
そう、本当に別の場所に飛ばされていたのだ
今居る場所はおそらく少女が住んでいるであろう村が見える平原。
「えっ？嘘…なんで…？」
信じられない、と言った顔をする少女に対し、彼はこう言う。
「村、ここで合ってる？」
「えっ…えっと…はい…この村です…」（一体どうやって…）
自分の住む村に戻れた事に安堵する少女。
それと同時に彼のした事を不思議に思う。
「よかった、じゃあ怪我を治すから、歩いて帰れるかい？」
「えっ？怪我を…治す？」
少女は思った。
この人は一体何者なのか…と
「うん、怪我は…ここだね…治癒開始」
少女の足首に手を置き、何か唱える。

すると、彼の手が光りだす。
「…よしっ、これで…。じゃあ、立ってみて」
光が消えた手を降ろしながら言う
「あ、はい…あ、あれ？立てな…い…」
「？…あぁ、腰が抜けちゃったか…まぁしょうがないよねぇ…」
足の怪我は治ったがどうやら腰が抜けてしまったらしく、立てないようだ
「もう大丈夫だよ、ほらゆっくり立って…」
そう言って彼女の手を取り、ゆっくりと立ち上がらせる
「あっ…」（暖かい手…）
「あっごめん、嫌だった？」
「いっいえ…何でもないです…」
（凄く暖かい…どうしてだろう…安心できる）
「うん！問題無いね！ここから村もそう遠く無い…歩いて帰れるかい？」
ここから村までは目と鼻の先。これなら大丈夫だろう。
（この人は…いえ、この人の事を考えるのは後にしましょう！）
「はい！ありがとうございました！この恩はいつか必ず返します！」
「アハハ、そういうのはいいよ、自分が勝手にした事だしね。後、できるなら敬語やめ

てもらえるかなぁ？堅苦しいのは嫌いでね…」
「…え、ええ、分かったわ…ともかくありがとう。貴方が居なければ私は今頃あの妖怪に食べられてたわ…」
「アレ、妖怪って言うんだ…あっ、名前で思い出したけど、名前、聞いていいかい？」
「ええ、私の名前は八意…八意永琳よ…」
「永琳、か…覚えたよ。次からは一人だけであんな所に行っちゃ駄目だよ？」
「ええ…なら次からは、貴方が一緒に行ってくれる？」
「アハハハハ…暇だったらねー…ところで、あんなところで何してたの？」
「ああ…薬草を…でもあの妖怪に邪魔されて…」
どうやら彼女はあの森の中に薬草を採りに行っていたらしい。
「なるほど…ならまた今度採るの手伝うよ」
「ええ、是非お願いするわ、妖怪に襲われるのはもうこりごりよ…」
「そうだね…護身術も教える必要がありそうだ…」
「護身術…それなら、弓の使い方を教えて欲しいわ！」
目をキラキラさせながら言う永琳。
「弓…か、大変だよ？それでｍ「いいわよ？」…じゃあまずなんで弓なのか聞こうか？」
「貴方の弓が格好良くて綺麗だったから…じゃ駄目かしら…？」

そう言う永琳。成程、ロマン武器とか言う奴ですね分かりません。
「…分かったよ、じゃあ、それなりの訓練はしないとね。まあ、とりあえず今日は村に帰った方がいいと思うよ？」
「ええ、そうするわ…ねぇ、貴方はこれからどうするの？」
「僕はとりあえずこの辺りに住もうと思う。空気も良いし、広いし…ね」
「そう…なら、また後日、来ても良いかしら？」
首を傾けながら問いかける永琳。
いいともーって言いたくなる。
「うん、むしろ歓迎するよ」
「ふふ…ありがとう。ところで一ついいかしら？」
「？なんだい？」
「貴方の名前、聞いてもいいかしら？」
「ああ名乗ってなかったね。僕の名前は―

―零無、だよ。」

阻止と実験

「無」は、全ての祖。
「無」が無ければ、「有」は成しえない。
「無」は、人格を持った、そして、後に「神」と呼ばれる者の一人を創った。
神は宇宙を創り、星を創り、生物を創った―

「零無…ね、覚えたわ。でも…随分と変わった名前ね？」
「それを言うなら永琳、君の名前も結構変わってると思うよ？」
「ふふ…そうね、それじゃあ私はもう行くわ。」
「ああ、分かったよ。気を付けてね？」
村に戻る永琳、太陽は既に傾きつつあった。
「んー…日が沈む前に家を創るとしようか…」
近くに小高い丘を見つけ、移動する。

「中々いい所だね、ここ…よし、ここに家を建てようか」
見晴らしがよく、緑も多い土地。ここをキャンプ地とする！
「広さはこれくらい…間取りは…適当でいいかなー…」
頭の中に家の構想を練る。そして手を地面につけ―
「よいしょ」（ボンッ！）
家、完成。普通の一戸建てだ。
一瞬で出来たことに突っ込んだら負けです。
「ふう…完成。じゃ寝よう…設定は１２時間でいいかな…」
家に入って寝室に直行、そのまま着替えずダイナミック就寝。この間、約５秒。
「Ｚｚｚｚ…」
因みに言っておくと、零無の就寝は自らを時間制限付きの封印術で封印することです。
なので設定した時間になると封印は解除、起床です。

視点…永琳

私は今日、不思議な人に助けられた。

その人は、何故か森の中から現れ、妖怪に襲われていた私を助けてくれた。
それだけではなく、一瞬で森の外、村の近くまで移動したり、怪我をした足をまた一瞬で治してくれた…
彼は…零無は一体何者なのだろうか…とりあえず、今は村に戻りましょう、色々とあり過ぎて疲れたわ…
それにしても零無…格好良かったなぁ…
「つじゃなくてっ…私は何を…」
ブンブンと頭を振り、雑念を消す。
「今は早く村に戻らないと…心配してるかしら…」
いくら周りから頭が良いだの天才だの言って持て囃されていても、所詮子供。
帰りが遅くなれば心配されるのは当たり前だろう。
少しずつ村に近づき、門番が永琳を見つける。
「ん…? 君は…永琳ちゃんだな? 随分帰りが遅かったようだが…?」
「いえ、少し寄り道をしてしまって…ごめんなさい」
妖怪に襲われた、なんて言えばどうなることやら。
これ以上心配させないように嘘をつく。
「そうか、夜は危険だからな、これからは気を付けるように。」

「はい、わかりました…」
そう言って村の中に入る。
いくら心配されない為とはいえ、嘘をつくのは気分の良い事ではない。
暫く歩いて行き、自分の家が近づく。
「ただいま…」
家に入りながら言う。すると奥から一人の女性が出てくる。
「おかえりなさい、永琳。…随分と遅かったけど、何かあったの？」
「いえ、興味深い物があったから少し寄り道をしてしまって…」
「そう…なら良いわ。もうすぐご飯だからね？」
「はーいお母さん」
私は手を洗い、居間に向かった。
そこにはお父さんとお母さん―私の家族が居た。
私が近づくとお父さんが声をかけてきた。
「永琳、随分と遅かったようだが、次からは気をつけなさい？外は危ないからな」
「…ごめんなさい」
「ハハ…謝る必要はない。永琳が無事に帰ってきたんだ、良しとしよう」
「うん…（妖怪に襲われたけどね…）」

その後、私は食事をし、部屋に戻って、そのまま眠ってしまった。
やはり疲れていたようだ、布団に入ると直ぐに私の意識は暗転していった。

翌朝

目が覚める。昨日何をしたか思い出せない。
少しずつ意識がはっきりとしてきた。昨日は…森に行って…
思い出した。不思議な人に助けられた…名前は、はっきりと覚えている…
「…零…無」
昨日の不思議な人の事を思い出す。だが、家に戻り、夕食後の事は全く覚えていない
…
おそらくそのまま眠ったからだろう、と推測する。
「…ところで今は何時かしら…?」
まだ暗い部屋。その中で私は、私が数か月前に開発した「時計」に目をやる。
「…まだ4時じゃない…どうせなら6時頃まで眠りたかったわ…」
起きたくもないのに勝手に起きてしまう事に苛立ちを感じる私。
好きな時間まで眠れる、そうならいいのに…と思ってしまう。
「とりあえず顔を洗って…そうね、やっぱり研究するとしましょう」

永琳はまだ幼い。が、幼いが故に何事にも興味を持つ。
彼女はその「興味」がある物を、自分が納得するまで研究するのだ。
研究するだけならば天才、等とは呼ばれないかもしれないが、彼女は研究したものの殆ど、或いは全てを解き明かしてしまう。
今まで分かっていなかったものを彼女が研究、謎解明…なんてことは、ここではよくある事である。
それが、彼女が天才と呼ばれる所以である。
「今日の題材は…そうね、怪我と治癒…これにしましょう」

視点：零無
―１２時間経過。封印、解除します。
その声を聴きながら起きる。今はおそらく5時２４分だ。
「ふあぁあ…よく寝た…?」
―結界に多数の敵反応。注意してください。
「はぁ…面倒臭いなぁ…」
―そうですね。総数およそ３０。遠距離からのキャノン砲の使用を提案します。
こらそこ、オーバーテクノロジーだの何だの言わない。

「んー…ヒュージキャノンとベクターキャノン、どっちがいいかな？」
要するにスゴイキャノン。　※詳細は後書きにて
―…どちらでもお好きな方をどうぞ。
何気にそう言う返答が一番困るんだよね…
「ようし決ーめた。選択肢其の参、ゼロシフトを使用し、敵に急速接近、そのまま敵を撤退させる。ってのはどうかな？」
要するに高速移動。　※詳細は後（ｒｙ
―…私は良いと思います。
「分かった。武装をゼロシフトに変更して？」
―了解。ゼロシフト、レディ。
そして、自分は高速で飛ぶ。
（注）「ようし（ｒｙ辺りから外に出てました。

――――――――ちょっと前、平原にて――――――――

「オイお前ら、今日はあの村を襲撃する」
妖怪のリーダー、ボスと思しき大妖怪が、薄らと見える村を指さしながら言う。
「分かりやした、アニキ。でもなんであの村を？」
子分、手下らしき中妖怪が問う。

「ククク…よくぞ聞いてくれた。今日あの村を襲うのはな…」
「襲うのは…？」
「あの村の人間共が、俺が今まで見た事も無い様な物を持っていたからだ」
ドヤァ…と言うＳＥでも付きそうな位のドヤ顔。
「成程…自分が知らない物はあってはならない…っつーことっすね！」
「ふむ…それもある…だが本当の目的はな…」
「目的は…？」
「あの村が万が一俺達の邪魔になるかもしれない。それを事前に潰すっつーわけだ」
ドヤ顔、二度目。
「成程…そういうことっすか…さっすがアニキ！頭いいっすね！」
「フン…そう褒めてくれるな…何も出んぞ？」（決まった…）
ドヤ顔、三度目。
「じゃあ、もう出発します？」
これを華麗にスルー。コイツ、中々やるな。
「（決まってなかった（ ・ ω ・ ））そうだな、芽は早めに摘んでおくに限る…」
「…アニキ、なんでちょっと涙声なんすか？」
「…何でもない、何でもないから…」

古代式、カリスマ的な物ブレイク。

そして今に至る。

（ククク…待っていろ人間共…今すぐ絶望の淵に…）

「ねえちょっと？」

「貴様…何者だ？（また決まらなかった（　；ω；　））」

ナンダコイツハ!?イッシュンデアラワレタゾ!?

周りの妖怪達は口々に喋る。

「君のせいで起きてすぐ動くことになったじゃないか。自分は寝起きが悪いんだ。すまないが腹いせにちょっと実験につきあってもらうよ？ゼロシフト、レディ。」

「フン…やれるものならやってみｒうぐぁあ!?」

「さて、本日の実験は、生身でのゼロシフト連続使用に耐えられるかだね。」

―はい。なるべく良い実験結果が取れる事を期待しています。

「リーダー、撃破。ゼロシフト、使用。」（殺してません）

一気に妖怪達の一番後ろにゼロシフトで移動。そのまま敵を四体程撃破。（殺してまｒｙ

更に、少し離れた所にいる中妖怪率いる部隊っぽいものを撃破。ゼロシフト、三度目。

多分八体位いた。（殺し（ｒｙ

次に、中心から逆サイドに居る敵部隊をこれまた瞬殺。ゼロシフト、四度目。多分八体。（ｒｙ

最後にあのカリスマブレイカーさんがいた前衛に戻る。五度目のゼロシフト。

「ふむ…結構イケるねこの身体…」

―でしょう？私が創ったんですよ？

「君しかいないじゃないか創る奴。ともかくありがとね。」

―え…あ、はい。どう…いたしまして…

「オマエェ！俺達のアニキに…なんてことをッ！」（殺してません）

「なら…君は僕をどうしたいんだい…？君達のボスをやった僕に…」（殺してま（ｒｙ

「俺はッ…オマエを殺すッ！」（殺し（ｒｙ

「アハハハハ…それでこそだ…おいで？遊んであげよう…」（ｒｙ

何このノリノリで悪人役する主人公。

「オラァァァッ！食らえェェッ！」

妖力を纏い、突っ込む。いやだから何この茶番？

「アハハ…無駄だよ…無駄無駄…ザ・ワールド…」

その瞬間、零無を中心とし、灰色の世界が広がるッ！

いやなんかｊｏｊｏっぽいの始まったんだけど？
「ゼロシフト…アハハ…君はよく頑張ったよ…この僕に対してッ！」
もう何も突っ込みません。
「やっぱりめんどくさい。そい」
ただの右ストレート（手加減してあります）。あ、正気に戻った…
「でもこれだけは言っておこう―

―そして時は動き出す…」

世界は元通り、時が動き出す。
「ぐあァァァッ！」
「悪いけど、帰ってもらえるかな？君ら多分あの村襲おうとしてたでしょう？」
「オマエ…クソッ全員！撤退！撤退ーッ！」
彼がさりげなく村の危機を救ったのを、村の人々は知らない。
勿論、永琳も例外ではなかった。